



Title	アンゴラ帰還者のアイデンティティの所在 : ドウルセ・マリア・カルドーゾの小説『帰還』をめぐって
Author(s)	上田, 寿美
Citation	Anais : Colóquio de Estudos Luso-Brasileiros. 2025, 51, p. 17-31
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/103343
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アンゴラ帰還者のアイデンティティの所在 —ドウルセ・マリア・カルドーゾの小説『帰還』 をめぐって

上田寿美

1. はじめに

ドウルセ・マリア・カルドーゾの小説『帰還』 *O Retorno* (2011) は、1974 年にポルトガルにおいて起こったカーネーション革命から一年後のアンゴラ独立を前に、本国への帰還を余儀なくさせられたポルトガル人移住者の本国帰還とその混乱を描いた作品である。作者本人もアンゴラからの帰還者であり、その意味ではこの作品は自身の体験をもとにした作品となっている。物語は主人公である十五歳の少年ルイの視点から、一人称の語りで描かれていく。カーネーション革命から一年後、ルイの一家はポルトガルへの帰還当日に、父親が黒人兵により連行され、母、姉を連れて、逃げるようにアンゴラから脱出する。本国では、行き場を失った帰還者の収容先の一つとして解放されていたホテルに滞在することになる。こうしておよそ一年に及ぶ五つ星の高級ホテルでの帰還者としての暮らしが、少年の目を通して語られていく。

ストーリーはアンゴラとポルトガルの二箇所で開催する。本国ポルトガルでの貧困から逃れて移住した両親を持つアンゴラ生まれの少年ルイは、学校の授業で学習した知識でしか本国を知らない。サラザール政権下における植民地アンゴラの教育では、宗主国ポルトガルは、「ロシアまであるほどの大帝国」として教えられ、そのイメージは、アンゴラやその他の植民地よりも発展した場所として、特に植民地で生まれ育ったルイにとっては憧れの地である。しかしながら、ルイは本国到着時にその衰退を知ることになる。帰還後の本国でルイが最初に目にしたのは、「車も入らないほどの狭い道や、悲しげで見窄らしい人々、死への関心さえ失ってしまったように何の役にも立たずにただ窓辺に佇んでいる歯の抜けた年寄りたち」(Cardoso, 2019; 84) (拙訳)

で、長引く植民地戦争により若者は戦地に駆り出され、残された老人だらけの鄙びて衰退した国であった。

植民地時代におけるポルトガルと植民地との関係性について Margarida Calafate Ribeiro (2003:3) は、ポルトガルを「想像上の中心としての帝国」と位置づけている。ポルトガルは大航海時代、非ヨーロッパ諸国に対する「ヨーロッパの顔」として認識されていたが、その後ヨーロッパの辺境へと転落し、近代的発展が遅れた国家とされ、象徴に過ぎなかった想像上の帝国に成り下がったとしている。本作品における植民地からの帰還者たちは、本国帰還によりポルトガルの衰退を知り、また、アンゴラにおける白人としての人種的優越性による支配的な立場から一転して、本国では”第二級市民”として扱われ、周辺の立場へと追いやられる。こうして帰還者たちは植民地では誇りとしたポルトガル人としてのアイデンティティを見失い、アンゴラに対する両価的な感情を抱えたまま、新天地ポルトガルでアイデンティティを再構築させようと奮闘する。小説中ではそうした帰還者たちのアイデンティティに対する複雑な心境が、キンブンド語やアンゴラ特有のポルトガル語と、本国のポルトガル語を使い分けることで繊細に表現されている。

本稿では、Ribeiro (2003) による「想像上の中心としての帝国」という概念を踏まえた上で、本国ポルトガルについての「英雄的言説」と「喪失の言説」という二つの言説を辿りつつ、小説『帰還』(*O Retorno*) に表されるポスト植民地主義的状况における帰還者のアイデンティティについて考察する。

2. 「想像上の中心としての帝国」

ここでは、世界システムにおける植民地時代のポルトガルの位置付けについて考察してみたい。植民地時代のポルトガルと植民地との関係性について、Ribeiro (2003) は、ポルトガルを「想像上の中心としての帝国」と定義づけている。この表現は、世界システムにおけるポルトガル社会の位置付けと、欧州経済共同体への加盟をめぐる研究の中で、ポルトガルを「想像上の中心としての国家」として社会学者 Boaventura de Sousa Santos により位置付けられた表現を応用したもので、国家 *estado* を帝国 *império* に置き換えたものである。Santos (1992) は、1986 年の欧州共同体および欧州経済共同体へのポルトガルの加盟

以降、世界システムの中の重要な地域であるヨーロッパにおいて、ポルトガルは周辺国という立場でありながら、ルズフォニアのアフリカ諸国との繋がりを持つ重要な役割を担う強みがあることから、欧州経済共同体（ECC）内におけるポルトガルの立場を「半周辺」と位置付けた。このことは、ポルトガルが「中心」と「周辺」の間の仲介者としての重要な役割を担っていることを意味している。そこから、ポルトガルが、他のヨーロッパの中心諸国に並びうるヨーロッパ国家であるというある種想像上の世界が生み出され、国内の停滞は、国家が段階的かつ不可逆的に緩和すべき一時的な特徴であるとする政治形態を、象徴的な言説や行為によって戦略的に構築したとし、この政治形態を「想像上の中心としての国家」（Santos, 1992:60）と位置付けた。Ribeiro（2003）は、この Santos の定義を尊重しつつ、アフリカのみならず、五世紀にわたるインドでの植民地支配や、そこに至る航路を含む全ての植民地帝国の次元を反映させて、国家（estado）を帝国（império）に置き換え、大航海時代以降の植民地時代のポルトガルの立場を「想像上の中心としての帝国」とした。これはつまり、ポルトガルは、本国としては衰退していながら、豊かな植民地によりその価値が維持され、帝国全体の中心としての体面が保たれていたということを意味する。ポルトガルの繁栄が植民地によるものであることは、18 世紀にこの地を訪れた外国人らによってすでに指摘されてきた¹。

Ribeiro（2003:5）によると、ポルトガルは隣国カスティーリャによりヨーロッパ大陸進出への道を閉ざされた地理的な閉塞条件を持つ領土を、大航海時代に拡張させ、カモンイスの『ウス・ルジアダス』において祖国のアイデンティティを昇華させることで「英雄的言説」を生み出した。その後、1580 年以降のフィリペ王朝による事実上のカスティーリャ併合を期に主権を失い、インド帝国の衰退からブラジルの喪失に至るまでの「喪失の言説」が誕生し、そこからポルトガルには二つの言説が共存することになる。そして、カモンイス、アントニオ・

¹ 「社会学者によるこの定義は、ポルトガルが帝国とヨーロッパの周辺として表現されるプロセスを示しており（「伝達のベルト」）、明らかな衰退を反映しつつも、帝国の地からヨーロッパへというその動きはポルトガルが中心として想像されることを可能にした。これが「想像上の中心としての帝国」という概念を定義してきた最も明確な表現である。ポルトガルはその帝国を通じて存在し、それによって中心として想像されていた。」（Ribeiro, 2003:12）

ヴィエイラ、フェルナンド・ペソーアらの作品にも見られるように、ポルトガルには常にこの「英雄的言説」と「喪失の言説」という二重性が見られるとしている。

このような「英雄的言説」が、植民地におけるポルトガル国民のアイデンティティの維持に利用され、「喪失の言説」を覆ってきたわけだが、小説中にもこの二つの言説を象徴的に表す場面が描かれている。アンゴラを出発する前に「本国」の女の子とアンゴラの女の子を比較するルイの空想のなかで、「英雄的言説」が本国の女の子のイメージとして表される。

でも本国にはサ克蘭ボがある。女の子たちがイヤリングに似せて耳に乗っける大きくてぴかぴかのサ克蘭ボが。本国の女の子とくれば美人に決まっている。ここの女の子たちはサ克蘭ボがどんなものだか知らないくせに、ピタンガみたいなものだって言う。たとえそうでも、本国のグラビアの中にいる女の子みたいに、ここの女の子たちがピタンガのイヤリングをしてはしゃぎ合っているところなんて見たことない。(Cardoso,2019; 7) (拙訳)

ルイにとって本国とは憧れの地であり、アンゴラに名残を惜しみつつも期待に胸を膨らませる。一方で、本国に見切りをつけてアンゴラへ渡った父親は、本国のことを多くは語らないが、酔いが回れば「本国には飢えとシラミ以外には何もない」(Cardoso,2019; 30) (拙訳)と悪態をつくように、実情を知る本国出身者による「喪失の言説」も語られる。学校で教えられた通りの「英雄的言説」を信じるルイは、到着後に本国の現状を目の当たりにし、「喪失の言説」を知ることとなる。

いや、そんなはずはない、今日僕らが見たものが本国であるはずがない。ポルトガルが小国ではないという証拠は、この帝国がヨーロッパの面積のどのくらいに相当するかを示した地図にあるのだ、ここからロシアまであるくらいの大帝国の本国に、車も入らないほどの狭い道や、悲しげで見すばらしい人たち、死への関心さえ失うほどに何の役にも立たずにただ窓辺に佇んでいる歯の抜けた年寄りたちなどがいるはずもない。(Cardoso,2019; 84) (拙訳)

この場面は、サラザール政権下でのアンゴラの学校教育では、「英雄的言説」のみが一貫して強調されてきたことを物語る場面であり、教育の現場では、実際に、「ロシアまであるくらいの大帝国」を描いた地図が用いられていた。こうして本国に到着した帰還者たちは本国の実情を知り、彼らの思い描いた本国の姿とは、まさに想像上の中心としての帝国であったことを思い知らされることとなる。そして、本国の人々から受ける差別と相まって、植民地帝国ポルトガルの国民としての帰還者の誇り高いアイデンティティもまた、大きく揺らいでいく。

3. 帰還者のアイデンティティ

ポストコロニアルの理論的枠組みにおけるアイデンティティは、抑圧的社会構造によってその特定の「位置づけ」が可能にされたり、制限されたりするもので、個人的な力ではどうすることもできない社会的、歴史的、政治的な立ち位置である、と鳥越(2013)²は述べている。また、植民地支配における人種と階級の関係について、「人種の面で抑圧を受ける共同体も、人種的には優位の共同体も、内部に階級という亀裂を抱えている」(ルーンバ,2001;160)とアーニャ・ルーンバ(2001)が述べるように、植民地支配を受けた社会内における人種と階級の関係性の中での個々の人々のアイデンティティは複雑であり、単なる植民者と被植民者という二項対立的関係には収まらない。こうした複雑な状況のなかで、ポルトガルの植民地における白人のアイデンティティとはどのようなものだったのだろうか。植民地における白人ポルトガル人のアイデンティティの認識について Meneses&Gomes (2013)は、海外領土で生まれた人々は、自らをその領土の「国民」として認識していたとしている。つまり、アンゴラ生まれの白人ポルトガル人にとっての母国とは、アンゴラの地であったという認識である。そのアイデンティティの形成と認識には、自分たちの(アンゴラの)「領土」が停滞し、無能で権威主義的な本国によって搾取の対象とされ、発展を妨げられているという感情に加え、本国のポルトガル人からは、アンゴラ生まれの白人は「第二級市民 *cidadãos de segunda*」として扱われていたという事実があったことが、アンゴラ人としてのアイデンティテ

² 「個人が生まれ持っている所有物でもなければ、自由に操作することも許されているわけではない社会的、歴史的、政治的な立ち位置」(鳥越,2013;37)

イが形成された要因であるとしている。実際に、ポルトガルの海外植民地に対する本国の階級的差別化は、黒人への人種差別のみならず、アンゴラ生まれの白人に対しても行われていた³。本国出身者は「第一級白人 branco de primeira」、アンゴラ生まれの白人は「第二級白人 branco de segunda」という区別が、19世紀から20世紀にかけて身分証明書にも記載されていたのである（Meneses&Gomes,2013; 87）。

次に、物語に登場する人物たちによってそれぞれ異なる立場から示される帰還者としてのアイデンティティの相違について考察する。

3.1. 『帰還』に描かれるアイデンティティの捉え方の差異

3.1.1. 本国出身の帰還者として

ここではまず、本国出身の「第一級白人」でありながら、本国に見切りをつけ、アンゴラに骨を埋めるつもりで移民したルイの父親の例を見る。

父さんは本国のことを少しも喋らない、母さんには二つの故郷があっても父さんにはそうじゃない。食っていけるところに属するものだ、でなければ恩知らずだ、僕が本国のことが恋しくないか、と尋ねると父さんの答えはこうだった。男たるもの、荷車が牛の後に従うように仕事に精を出さねばならんものだ。（Cardoso,2019; 11）（拙訳）

しかしながら、革命後、黒人兵によりアンゴラを追われることとなったルイの父親は、帰還者としてポルトガルに戻り、その地で再び生きていく決意を固める。

食っていけるところに属すものだ、という人生の教訓の一部を父さんは忘れてしまうべきじゃなかったのに、と思い始める、本国は父さんにひもじい思いをさせるだけだった、ということをおぼろけを忘れるべきじゃなかった、本国からは一歩たりとも出たりし

³ ポルトガル人の定義とは、サラザール時代は皆がポルトガル人という定義であったが、独立後には「ポルトガル生まれのポルトガル市民の曾孫であることを証明することができるものだけがその権利を有する」とポルトガル国籍を有する権利が法律により与えられた。（Meneses&Gomes,2013;103）

ない、などと父さんは誓うべきじゃなかったんだ。到着してすぐの二日か三日たったある朝、父さんはタバコを吸ってベランダに座り、海を見つめながらこう誓った、もう誰もどこへも俺を追い出したりはしない、ここが俺の祖国にならねばならんだ。(Cardoso,2019; 243) (拙訳)

この父親のように、本国を捨ててアンゴラに希望を見出した人々の中には、祖国との関係性に葛藤を抱え、アイデンティティが揺らぐ経験をしたものも少なくなかった。

革命後本国へと向かった人々は一様に帰還者 *retornado* と呼ばれていた。しかし戻る故郷も親族もないアンゴラ生まれの白人や、故郷を捨てて植民地へと渡った人々の中には、自身を難民と自認するものも少なくなかった。この「難民」という自己定義には「帰還」の概念が含まれていない。彼らにとって「帰還事業」とは、むしろ故郷アンゴラを離れることであり、脱植民地化によってアンゴラから切り離されるという経験は、彼らのアイデンティティを大きく揺るがすこととなった。こうした事実は、彼らを帰還者と言えるのか、帰還者とはいかなるものを指すのか、という問いを浮かび上がらせる。実際、帰還事業は特定の年月により画然と区切ることができるものではなく、その定義は極めて困難である。

3.1.2. 本国における帰還者としてのアイデンティティ

1974年5月から1975年11月にかけてアンゴラからポルトガルへと帰還した人々だけでも3万人以上とされ、モザンビークなどアンゴラ以外の地域からの帰還者も合わせると50万人にも達し、当時のポルトガル本国の人口を2～3年のうちに20%増加させることとなった⁴。大量の帰還者が流れ込んだ本国ポルトガル人にとって、帰還者とは、黒人労働力を搾取し、その富を享受してきた植民地主義の担い手であり、また、本国における限られた雇用の機会を奪いかねない他者として受け止められていた。物語中には、そうした本国ポルトガル人から受けた差別と偏見が、街の中や学校など、あらゆる場面で描かれる。

⁴ Meneses&Gomes,2013; 96-97

ここのウェイターは僕らにここにいてほしくないし、僕らの世話をするのも嫌なのだ。連中の考えは、黒人たちをこき使ったせいで僕らは追い出され、全部失ったけど、こうなったのも自業自得で、向こうで黒人に世話をしてもらったみたいはこの五つ星ホテルに滞在する資格なんてない、ということだ。ウェイターたちは僕らなんかの世話をするよりも、ろくにナイフもフォークも使えない黒人たちの世話をの方がマシなんだ、黒人たちは五世紀にも及ぶ抑圧の挙げ句に、今度は戦争から逃れなければならなくなった犠牲者だと思っている。(Cardoso,2019; 91-92) (拙訳)

このように本国の人々からは帰還者が歓迎されていないことが、ルイの心の声を通して描かれる。また学校でも一部の教師による帰還者の生徒たちへの差別があり、それに反発してルイは教師の質問にたいしアンゴラの土着の言語、キンブンド語で答えることで帰還者としてのアイデンティティを誇示する。

九の平方根は、そして僕はこう答える、スンドゥ、沈黙、
イア、沈黙、マイエ、他の帰還生たちがクスクス笑い出す、ク
ソ女はわからずにこう言う、何を言っているの、キンブンド語
で答えました、ポルトガル語で言ってちょうだい、ここではポ
ルトガル語を話すのよ、九の平方根は、スンドゥ・イア・マイエ、
向こうでそう教わったんです。皆が笑った、規律違反よ、今す
ぐ出て行きなさい、オーライ、(Cardoso,2019; 145) (拙訳)

主人公ルイをはじめ、帰還者たちはこうしたキンブンド語やアンゴラの特有のポルトガル語を仲間内で使用し、本国の人々の前では帰還者のみが理解できる隠語として機能させることで、アイデンティティを保とうとする。また、帰還者の男性たちがアンゴラ時代の生活を懐かしんで、「ムニュング(売春宿)」、「キタッタ(娼婦)」、「キルンバ(若い娘)」、「キンボ(村)」、「キンボンボ(ビール)」などのアンゴラの売

春街オペラリオ地区で用いられた俗語を用いることで、失われた故郷への郷愁を分かち合う。

言葉とアイデンティティの関係について、小野原（2004）は、言葉の機能の一つとして、「特定の言語や表現を選択・使用して自己のアイデンティティを形成したり、認識したり、表出する機能」があるとし、「人はある言語や云いまわし（表現）を使い分けることで自分のアイデンティティを主張することがある。そのような言葉を選ぶことによって、自分の認知の仕方や社会的に聞き手に影響をあたえようとするのである」（小野原,2004;26）と指摘する。こうした見解に即して見れば、本小説において、本国のポルトガル人には理解不能なアンゴラ由来の言語を用いるという帰還者たちの行為は、自己のアイデンティティを主張しようとする姿に他ならない。一方で、白人帰還者らにとって黒人は従属的社会集団であり、アンゴラの黒人が用いるキンブンド語は、言語階層においてポルトガル語よりも下位に位置付けられる言語でもある⁵。実際に小説中には、主人公ルイの黒人についての差別的な考えが述べられている。

問題は彼らは愚かだということだ、あいつらは黒人だ、知り合いでなくても。黒人たち。あいつらが何であるか説明しようというのでなければ、あいつらは黒人だ、で十分だ、黒人は怠け者だ、トカゲのように日光浴してばかり、黒人は傲慢だ、下を向いて歩いているのは僕らを見ないようにするためだ、黒人は馬鹿だ、何を言われているのか理解できない、黒人は強欲だ、あいつらに手を与えればたちまち腕も欲しがってくる、黒人は恩知らずだ、あいつらのためにどれだけのことをしてやっても満足することはない、黒人のことなら何時間でも話してられるが、白人はそんなことで時間を無駄にしたくないので、ただこう言えばいいだけだ、黒人だから、と。(Cardoso,2019; 25)
(拙訳)

⁵ Ramos（2000）によると、「キンブンド語は「遅れた」言語とみなされ、ポルトガル語、「より明るい肌の人々の言語」に固執する傾向がある。」としている。

こうした考えを持ちながら、自分たちのアイデンティティを誇示するために黒人たちの言葉を用いざるを得ない帰還者たちの感情には、彼らにとって真の故郷であるアンゴラにたいする郷愁や親しみとともに、支配と従属の記憶を内包する両価的な感情が潜んでいる。

3.1.3. 本国への同化

一方、ルイの姉ミルーシャは帰還者であることを恥じ、アンゴラでの言葉を使わず、本国で用いられる言葉を使おうとする。

姉さんは帰還者であることを恥ずかしいことだと思っている、
ここの人間のふりをして、帰還生、と赤い判が押されたカード
を隠している、食堂でタダで軽食が食べられるカードだ。姉さん
はお腹がペコペコのくせに、帰還生のカードをここの連中に見ら
れるのがいやで食堂に行く勇気がない。ぶかぶかの服を着て、向
こうで焼いた小麦色の肌をして、唇に血が滲んでも気にせず
に素敵な笑顔で笑うのに帰還者じゃない、なんてことが通用
すると思っている姉さん、帰還者じゃないふりをして、
マタビッショ^{朝食}、ジェレイラ^{冷蔵庫}、フーロス^{サボリ}という代わりに、
ペケーノアルモッソ^{朝食}、アウトカーロ^{バス}、フリゴリーフィコ^{冷蔵庫}、
ボルラス^{サボリ}、と言う姉さん、帰還者になるのが嫌なのに、朝起き
て、今日はピタンガを食べる夢を見たわ、と言う姉さん、悲し
すぎて、僕と言い争ったり、僕のことをバカ呼ばわりする元気
すらもない姉さん。(Cardoso,2019; 150) (拙訳)

この場面では、ミルーシャが自らが帰還者であることを隠すために、本国で一般的に用いられている語彙、「ペケーノアルモッソ（朝食）」、「フリゴリーフィコ（冷蔵庫）」、「アウトカーロ（バス）」、「ボルラス（サボリ）」などを意識的に用いる様子が描かれ、自身の出自に起因する差別や偏見を回避しようと、より優位にある共同体への同化を余儀なくされる厳しい現実が浮かび上がる。一方で、ピタンガの夢を見る場面には、アンゴラへの郷愁が、夢という無意識の領域に表れており、

彼女の心の奥底に残された記憶と感情が示唆されている。また、男性であるルイに比して、女性として、かつ帰還者としてのミルーシャが置かれた社会的条件がより困難であることも強調されている。彼女は「アンゴラ出身の帰還者」ではなく、「本国のポルトガル人」としてのアイデンティティを確立しようと努める。

以上のように、本国と植民地のあいだで引き裂かれた人々のさまざまな姿が、個々の語彙の選択や夢の表象、アイデンティティの模索を通じて描かれている。

こうしたアイデンティティの変容について、小野原（2004）は、人は常に複数のアイデンティティの束を抱えながら生きており、状況に応じて自らにとって望ましいアイデンティティを選択する一方で、望ましくないアイデンティティを返上することにより、自己の存在価値を確立しようとし、問題は、その人がいかなるアイデンティティの束を持っているかではなく、その中で何を重要とみなすか、つまりどのアイデンティティを中核に据えるかである、と述べている。こうした視点に立てば、物語に登場する人物たちもまた、それぞれの経験や状況に応じて、自身にとって最も重要なアイデンティティを選択しながら生きていることが明らかになる。

4. おわりに

以上、小説『帰還』に見られる「想像上の中心としての帝国」ポルトガルをめぐる帰還者のアイデンティティについて考察してきた。「英雄的言説」を信じた植民地生まれの帰還者ルイは、本国の「喪失の言説」を知り、本国への憧れが幻滅へと変わる。また、帰還者としてのルイのアイデンティティは、本国で受ける帰還者への差別により大きく揺らいでいく。

本小説では、帰還者たちのアイデンティティを表す手段として、彼らの使用する言語が重要な役割を果たす。主人公のルイは、本国にはないアンゴラ特有の語彙を用いることで、帰還者としてのアイデンティティを誇示し、一方、姉のミルーシャはアンゴラでの言語を封印することで、本国のポルトガル人としてのアイデンティティを構築しようとする。このように、帰還者のアイデンティティは同じ家族であっても立場やジェンダーの違いにより様々に描かれ、「アイデンティティ

とはなにか「である」ということと同時に「なる」ということでもある」というルーンバ (2001:223) の言葉どおり、登場人物はそれぞれに必要なアイデンティティを築き上げようとする。

帰還者と呼ばれる人々の証言や記憶から見えてくるのはアイデンティティの多義性であるが、これら帰還者の記憶により生み出された文学に共通するテーマは、アンゴラへの懐かしさの感情である、と Meneses&Gomes (2013:98) が述べるように、この作品に登場するそれぞれの帰還者にも共通するのが、アンゴラに対するある種の懐かしさである。

カーネーション革命以降見過ごされてきた「帰還者」というテーマは、2000年代に入ると再び注目されるようになり、カルドーズの『帰還』をはじめとしてアイダ・ゴメスの『ボウザフローレスの黒人たち』など、帰還者を題材とする小説が次々と登場した。これにより、脱植民地化に伴い生じた個々の人々の問題にもようやく目が向けられるようになってきた。本稿では取り上げることができなかったが、小説中にはアンゴラの黒人娼婦やゲイといった登場人物を通じて、セクシュアリティやジェンダーの問題なども描かれており、ルーンバ (2001:202) が指摘する、「人種の上でも、ジェンダーの上でも同時に抑圧を受けているのは黒人女性だという事実」が、この作品の中に描かれる社会構造の中にも如実に映し出されている。このように、本作は帰還者の問題にとどまらず、ポストコロニアルな視点から多様な社会的課題を提起する重要な文学作品である。

参考文献

小野原信喜,大原始子 (2004) ことばとアイデンティティ：言葉の選択と使用を通して見る現代人の自分探し。三元社, 205p.

鳥越千絵 (2013) ポストコロニアル的視点から語られるアイデンティティ：質的異文化コミュニケーション研究の動向。西南学院大学英語英文学論集. vol.53,no.3, p.27-51. <http://repository.seinan-gu.ac.jp/handle/123456789/304> (参照 2024-8-6) .

西脇靖洋 (2012) ポルトガルの EEC 加盟申請：民主化、脱植民地化プロセスとの交錯。国際政治 / 日本国際政治学会 編. (168) ,30-

43. <https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R000000004-I023596874> (参照 2024-9-10) .
- 朴裕河 (2016) 引き上げ文学論序説：新たなポストコロニアルへ. 人文書院, 208p.
- ビル・アッシュクロフト (2008) ポストコロニアル事典. 木村公一編訳. 南雲堂, 380p. 原書名 *Concepts in Post-Colonial Studies*.
- アーニャ・ルーンバ (2001) ポストコロニアル理論入門. 吉原ゆかり訳. 松柏社, 353p. 原書名 *Colonialism/Postcolonialism*.
- エドワード・W・サイード (1993) オリエンタリズム (上). 今沢紀子訳. 平凡社, 2017. 456p. 原書名 *Orientalism*.
- エドワード・W・サイード (1993) オリエンタリズム (下). 今沢紀子訳. 平凡社, 2020. 456p. 原書名 *Orientalism*.
- Cardoso, D. M. (2019) . *O Retorno* (8th ed.) . Tinta-Da-China.
- Ferreira, Patrícia Martinho. (2015) . O conceito de 'retornado' e a representação da ex-metrópole em *O Retorno e Os Pretos de Pousaflores*. *ellipsis*, Vol.13. <https://doi.org/10.21471/jls.v13i0.6> (参照 2024-6-20) .
- Gerald, B. J. (2004) . *Angola Under the Portuguese*. First Africa World Press Edition.
- Gomes, Kathleen. "Há retornados que acham que sou uma traidora". *Público*. 2015-9-17.
<https://www.publico.pt/2015/09/17/culturaipsilon/noticia/dulce-1708071> (参照 2024-6-20)
- Lourenço, Isabel Maria dos Santos. (2018) . *Retornados - Representações Sociais na Integração* (1974-79) .
<https://hdl.handle.net/10216/113658> (参照 2024-8-20) .p.59-107.
- Meneses, Maria Paula, Gomes, Catarina. (2013) Regressos? Os retornados na (des) colonização portuguesa. *As guerras de libertação e os sonhos coloniais: alianças secretas, mapas imaginados*.
<https://hdl.handle.net/10316/42480>. (参照 2024-8-20) .
- Ramos, Rui. (2000) . *Quimbundo no português*. Ciberdúvidas da Língua Portuguesa.
<https://ciberduvidas.iscte-iul.pt/consultorio/perguntas/quimbundo-no-portugues/5362> (参照 2024-9-20)

- Ribeiro, Margarida Calafate. (2003) Uma História de Regressos: Império, Guerra Colonial e Pós-Colonialismo. *Oficina do CES*, Vol. 188. <https://hdl.handle.net/10316/32718> (参照 2024-6-20) .
- RTP. (2024,jun.10) *Retorno, Visita Guiada Episódio*. [Video]. RTP. <https://www.rtp.pt/play/p13200/e775172/visita-guiada>. (参照 2024-6-20)
- Santos, Boaventura de Sousa. (1992) O Estado, as Relações Salariais e o Bem-Estar Social na Semiperiferia: O Caso Português. *Oficina do CES*. 32 . <https://hdl.handle.net/10316/10939> (参照 2024-6-20) .
- Santos, Boaventura de Sousa. (2003) Entre Próspero e Caliban: colonialismo, pós-colonialismo e inter-Identidade. *Novos Estudos Cebrap*. <https://hdl.handle.net/10316/81691> (参照 2024-6-20) .

Sumário

A identidade dos retornados de Angola — Em torno do romance *O Retorno* de Dulce Maria Cardoso

O presente artigo analisa a identidade dos retornados angolanos representada no romance *O Retorno* (2011), de Dulce Maria Cardoso. A obra conta, do ponto de vista de Rui, protagonista nascido em Angola, e as dificuldades vividas por uma família forçada a regressar a Portugal após a Revolução dos Cravos de 1974 e a independência da colónia.

O protagonista, que em Angola vivia numa posição superior enquanto branco português, passa a ser visto com desconfiança e sofre discriminação quando chega a Portugal. Entre os retornados, há quem queira manter a sua identidade e há quem tente adaptar-se à nova realidade da metrópole. Essas diferenças identitárias são habilmente expressas através das escolhas linguísticas das personagens, nomeadamente o uso de expressões características do português angolano, do quimbundo ou do português da metrópole. Este artigo parte de uma perspetiva pós-colonial e usa a ideia de Portugal como “o império como imaginação do centro”, proposta por Ribeiro (2003), para examinar como a identidade dos retornados brancos muda ao longo do romance. Para isso, analisa dois tipos de discurso formados ao longo de cerca de cinco séculos de domínio colonial: o “discurso heroico” e o “discurso da perda”.